2013年

春のボランティア報告会

日本福祉大学災害ボランティアセンター

目次

【活動報告】

・萩の花プロジェクト　P2～

・福島こどもリフレッシュスキーキャンプ　P7～

・いわて GINGA - NET プロジェクト 春銀河　P11～

～活動報告書～第 5 次萩の花プロジェクト～

企画名	第 5 次萩の花プロジェクト		
実施日時	2013 年 2 月 25 日(月)～3 月 26 日(火)		
場所	宮城県石巻市(開成団地・あがらいん、南境団地、大森団地ほか)		
活動主体	CLC(全国コミュニティライフサポートセンター)	報告者	笠井実香　藤倉遼介 休場有希子、岩重昌樹
参加者 （43 名）	第 1 クール:爲本貴大、大石竜生、太田翔子、宮野綾子、増田康宏、宮脇由佳 第 2 クール:爲本貴大、岩重昌樹、宇野千春、小倉明梨、岩田亮、本杉欣也 第 3 クール:岩重昌樹、大城志織、鳥谷愛、羽根さつき、桑野泰文、松原竜二 第 4 クール:休場有希子、東山実希、山脇花奈美、藤倉遼介、辻涼平、中崎純子 第 5 クール:休場有希子、東山実希、山脇花奈美、藤倉遼介、辻涼平、中崎純子、虎谷汐莉、分部和美、鮎沢日菜子、川上祐依、澤田麻美 第 6 クール:棚橋由佳、柳田萌、岡田眞有、岩永英明、飯田康太 第 7 クール:安藤誌洋、永田雄基、横田昌伸、太田智幸、森田安美佳、花井志織 第 8 クール:永田雄基、坂森茜、宮下遥、笠井実香、増井碧、藤田知也		

【目的】

・「開成団地」（1000 戸を超える被災地最大の仮設住宅）でイベントの企画などを通して被災者の方々の「つながり」を作りの支援をする。

・ボランティア活動を通し、学生の東日本大震災への関心を高める

【実施概要】

・あがらいんが行っているキッチンカーのお手伝いと足湯の活動

場所：開成団地、大森団地、南境団地

キッチンカーについて：お惣菜の移動販売のことで、仮設住宅内のキッチンは狭くご飯を作らない家庭が多いため、お惣菜を販売することでご飯を炊くきっかけづくりをしようというもの。

足湯について：キッチンカーで来てくれた住民の方々は、キッチンカーで惣菜を購入したあとに、すぐに帰ってしまう。そこで、その場で足湯を開催することで、住民の方どうしの「つながり」づくりや、足湯を通した学生とのコミュニケーションによる楽しみを提供しようというきっかけからはじめた。詳しくは別紙にて紹介。

・あがらいんでの食事会

あがらいんが毎週木曜日の午後から継続的に行っているもの。来てくださった方々にご飯を提供することで、楽しく会話などの、「つながり」づくりのきっかけの場を提供する。

・学習教室

あがらいんで石巻市の元教師の方が毎週土曜日の午前中に行っているもの。子どもたちの宿題や勉強を一緒に行っている。

・イベント

各クール、子ども達やお年寄りの方々を対象に自分たちが企画したさまざまなイベントを行った。

・メーリングリストの活用

各クール一日の活動について、メーリングを通してボラセン事務局スタッフに報告した。

【イベント紹介】

・ひなまつりイベント（第 2 クール）

3 月 3 日、現地の子ども達やお年寄りの方々を対象に、ちらしずしとケーキを作ったり、折り紙や、みんなでうたを歌ったりした。みんなで一緒に料理を作ったり、うたを一緒に歌ったりすることで、普段あまり一緒に接する機会のない子どもとお年寄りの方が触れ合う機会をつくることができたらと考えた。

・ビンゴ大会（第 3 クール）

あがらいんでの食事会の際、お客さんとメンバーでビンゴ大会をした。普段あまり食べることがないものに接してもらえたらと考え、景品は名古屋のお土産を用意した。メンバーもお客さんと一緒にやりながら、とても盛り上がることができた。

【子どもを対象にした活動について】

・「子どもノート」の作成

１月に行った萩の花プロジェクト・週末ボランティアから「子どもノート」を作成し、子ども一人ひとりのこと(ニックネーム、性格、家族、すきなこと、活動の参加記録など)をクールごとに引き継ぎ共有していった。単にこどもと遊ぶだけではなく、子どもが抱えている思いや問題にアプローチするきっかけになった。

・招待状

継続的に子どもたちにかかわっていくために、イベントを行う際、一度萩の花プロジェクトのイベントに参加してくれた子どもたちに招待状を作成し、仮設住宅まで届けた。実際招待状を持ってイベントに参加してくれた子どもたちも多かった。

【活動を通しての感想、反省(抜粋)】

・子どもたち一人ひとりが抱えている問題や被災地の今を知ることができた。“復興”は進んでいると思っていたが、建物がたてられていない場所があるなど、あまり進んでいない部分もあるのだと感じた。そういったことを伝えて、生かしていきたいと思う。そういうことが、私たちにできる支援のスタートだと思う。

・今回の経験を通して、被災者の方々があまりボランティアに頼りすぎにならないようにかかわっていくことも、ボランティアをする側にとって大事なことではないかと感じた。

・被災地においてこれから大切なことは仮設住宅に住む地域の人たち同士の関わりだと思う。そこで本日私たちが行ったようなイベントなどを通して、地域の方同士が関われる１つの機会をつくっていることを感じた。

・イベントでは子どもたちのたくさんの笑顔をみることができて、やったかいがあったと感じた。子どもたちの様子が以前夏に参加した時よりも変わっていたり、成長が垣間見ることができてうれしかった。

・子どもと遊んだとき、子どもたちに対して叱ったり、注意したりすべきところでしなかったことがあった。「楽しんでほしい」という気持ちが大きかったということ、仮設住宅で騒げないなど、うっぷんがたまっている子どもを叱ることで居場所を奪ってしまわないかの葛藤があったためである。遊ぶときは遊ぶ、叱るところは叱るといったメリハリをつけることなど、子どもたちとのかかわり方をどう見直していくべきかが今後の課題であると考える。

・子どもと過ごしながら、日々の生活面での問題や嘘(例えば、クラス内でいじめられている。あがらいんに居たいがために嘘をいう。など)に直面し戸惑うばかりだった。子どもの言動の裏には必ず理由がある、そう思いつつもどのように対応するのが正解であったのかなど自問自答を繰り返しながらの活動であった。

【活動を通しての川柳、短歌(抜粋)】

・伝えたい　東北の今と　この気持ち
・被災者が　語ってくれた
　“想い”込め　帰って広げる　支援の輪
・ボランティア　こころに寄り添う　黒子役
・何できる　自問自答を　繰り返す
・宮城来て　改めて思う　被災地との距離
・新しい　出会いに感謝　あがらいん

【プロジェクト全体を通しての反省】
・各クールとしての活動も大事だが、萩の花プロジェクト全体の活動に対する意識や視点を、それぞれがもっと考える必要があるのではないか。(ex.メーリングを参加メンバー全員に送って共有する)
・足湯での住民の方同士のコミュニケーションや、子どもとのかかわりを通して、一人一人をどのようにとらえて、それを次のクールにどうつなげていくのか。個人に対してどのようなアプローチをしていくべきなのかを明確にしていくべきではないか。

足湯の活動について

ねらい

足湯という「距離」、学生という「立場」を生かして被災地の方が今感じていることを気軽話せる場を作りリラックス感や満足感を感じてもらいたい、集まってもらった方にお茶を出すことで、住民同士の仲を深めてもらいたいと考えた。また、コミュニケーションをとるなかで聞いた言葉、思いから、被災者が抱える問題について学生が考えるきっかけを作りたいと考えた。

日本福祉大学「足湯隊」

今回は南境、開成 10 団地、大森第 4 団地の集会所、あがらいんにて週 1 回ずつ 4 週間（2.26～3.24）にわたって一日約 10 人程度の住民の方に足湯を行った。
足湯が終わったあとは、「足湯ノート」にその時話した内容・感想を学生が記録し、次のクールへの引き継ぎを大切にした。

活動を終えて

足湯で話を聞く中で、「仕事を無くして毎日テレビを見ている」、「どんなに豪華な食事でもひとりで食べるのは寂しい」、「人間関係に疲れる」という声を聞き、仮設住宅で暮らす孤独や苦労の存在を知ることができた。足湯には毎週来てくださるリピーターの方が多く、「足湯があるから今日は化粧してきたの」、「来るのを待ってたよ」、という声から、被災者にとっての楽しみにつながることができたと考える。　集会所によっては、住民のコミュニティーができて住民の方でイベントを企画しているところもあれば、足湯で初めて出会う人ばかりという場所もあり、仮設ごとの住民のつながりに差があるということを学んだ。

学生の感想（足湯ノートより）

・自己紹介が終わるとすぐに震災の話をし始めた。辛い思いをしてるのではないかと考えたけれど、私に聞いて欲しい、知ってほしいという思いが伝わってきた。（笠井実香）
・同じ立場の人には言いづらい悩みをこのような場で話すことができればいいと思いました（増井碧）
・一人暮らしでいると、仮設の中にこもりがちだけど、こういう場に足を運んでもらって少しでも外に出るきっかけになれば嬉しいなと思った。（宮下遥）

～福島子どもリフレッシュスキーキャンプ～

企画名	福島子どもリフレッシュスキーキャンプ		
実施日時	３月２９日～３月３１日		
場所	長野県黒姫高原スキー場		
活動主体	福島大学災害ＶＣ 日本福祉大学災害ＶＣ 関西学院大学スキー同好会 ZOO,OB	報告者	永田雄基
参加者 （４名）	高橋舞　為本貴大　宮脇由佳　永田雄基		

●目的

・子どもたちを思いっきり遊ばせる

・親の休み時間の確保

・日常のストレスからの解放

●日程

一日目

３月２９日（金曜日）	
時間	内容
17：40	名古屋発
20：00	長野駅乗り換え
21：58	黒姫駅到着
22：30	ライジングサンホテル到着＆福島大学合流
22：40	ミーティング
23：00	風呂
24：00	就寝

二日目

３月３０日（土曜日）	
時間	内容
7：00	起床
7：30	朝食
9：00	スキー（午前の部）
12：00	昼食
13：00	スキー（午後の部）
15：00	生活班対抗ソリレース
17：00	入浴
18：30	夕食
19：30	ビンゴ大会
20：30	文集作成
22：00	消灯
22：30	ミーティング

・スキー

関西学院大学スキー同好会 ZOO の OB によるスキー班全６班（初級①②③④中級①上級①）に分かれてのスキーレッスン。

・生活班対抗ソリレース

生活班に分かれてのソリレースを、４組ごと、２回に分かれてソリレースを行った。（生活班＋学生＋ZOO）

・ビンゴ大会

生活班対抗のビンゴ大会、各班で一枚ビンゴカードを配り数字を決めビンゴを行った。上位 3 班に豪華賞品と、ZOO の方々がプレゼントを子どもたちに配っていた。

三日目

3 月 31 日（日曜日）	
時間	内容
7：00	起床
7：30	朝食
9：00	スキー
11：00	ホテルへ移動、着替え

12：00	昼食
12：45	解散式
13：00	ホテル出発

・スキー

二日目に引き続き ZOO の方々のご指導のもとスキーのレッスン。

・解散式

子どもたちとお別れ・・・・・

●参加者の感想

・スキーでは、みんな初めは全く滑れなかったけれど ZOO の先生の話を熱心に聞いていて、3 日目には全員が自分でリフトに乗り滑れるようになっていました。終わりには「もう一回だけ滑りたい。」と、たくさんの子どもが自分に言ってきました。その時に「子どもたちは今回のスキーキャンプを楽しめていたんだな」と、感じました。

・スキーキャンプを通して人とのつながりが広がりましました。この経験を活かして、もし、また福島県の子どもたちと一緒に行うキャンプがあれば参加したいと思いました。

・ちょっとした感動、衝動、欲求、わがまま、甘え、おふざけ、悩み事など、子どもによって訴え方は違えども、なにかしらの行動や言動で気持ちを伝えてくれたことがとても嬉しかった。大学生は、そんなふうに気軽に話せる友達、兄弟のような存在になれる。だから、親や、家族、学校の先生とはまた違った視点で子どもたちと関われた。

・震災から約２年が経ったが、子どもたちはこれまでも、そして今もたくさんの我慢をしていると思う。遊び場がなかったり、周りの空気をよまないといけなかったり、気を遣ったり、生活環境も変わってきている。私たちスタッフは、この二泊三日という限られた時間の中で、いかに子どもたちの自然体を引き出せるかが鍵だったと思ったし、これからも大切にするべきことだと思った。

・このキャンプを通して、子どもの成長も多く見ることができた。班の中で譲り合い、協力する場面が最終日に近づくにつれ多くなった。女の子と男の子の仲も良く、班の垣根を越えて子どもたちは友達を作っているのをみて、とても嬉しかった。

・子どもの全力でスキーキャンプを楽しむ姿を見て、このキャンプを持続することの大切さを改めて感じた。子ども達は、今回のスキーキャンプを本当に楽しみにしており、中には去年の夏に行われた、サマーキャンプの参加者もいた。福島では、原発の影響により外で思いっきり遊ぶことができず、子どもだけではなく、親もストレスが溜まる現状がある。このような現状を少しでもケアができるように、私たちは活動を続けていかなければいけないと感じた。

・キャンプに参加して毎回、子どもの爆発的な元気良さに驚かされる。日ごろ溜まっていたストレスをうまい具合に吐き出してくれていたらそれほど嬉しいことはない、子どもの元気の良さが私たちの活力に還元されるので、これからもこの活動を続けたいと思った。

～いわて GINGA－NET プロジェクト～

企画名	いわて GINGA-NET プロジェクト　春銀河 2013		
実施日時	2013 年 3 月 19 日（火）～3 月 25 日（月）		
活動場所	岩手県沿岸地域		
実施団体	いわて GINGA-NET プロジェクト	報告者	樋澤里保　藤谷裕一
参加人数（5 名）	小野寺真梨、久米奈津美、樋澤里保、宮川優実、藤谷裕一		

＜活動スケジュール＞

19 日（火）　拠点集合、視察巡回（宿泊拠点まで送迎バス）
20 日（水）　活動日
21 日（木）　活動日
22 日（金）　活動日
23 日（土）　活動日
24 日（日）　活動日、拠点解散（送迎バス）

＜主な活動＞

応急仮設住宅でのサロン活動、子どもの居場所支援、学習支援。
パン工場の再開、カフェのオープン準備
わかめ漁業

●活動一日目（沿岸部視察、仮設商店街回り）

到着後オリエンテーションで、地図を用いた岩手の説明、拠点の使用方法、銀河の歴史についてのお話があった。オリエンテーションを終え、バスに乗って釜石、大槌の視察に向かった。

釜石では青葉の仮設商店街と天神町の仮設商店街を視察。商店街では、可愛いエプロンを売っているお店、美味しいシフォンケーキやコーヒーを売っているお店など仮設とは思えない素敵なお店がたくさんあった。お店の方の温かい人柄にふれ、また沿岸の商店街の特色を発見し、貴重な体験をさせていただいた。明るく、温かい方々に自分たちが元気をもらったような気がした。

大槌町では、高台に上って町を一望すると、津波の被害の大きさがよく分かった。復興が進んでいる、進んでいない…などいろんなことが言われているが、自分の目で町を見たことで町の人達の思いや、現実を感じさせられた。また、震災以前の町の様子がわからないことや、一年前との変化を比較することができないことに悔しさを感じた。町役場を震災の記憶として残すのか、前に進むためにも無くしてしまうのか難しい問題になっている。2 年たった今だからわかる問題や現状が沢山あった。

*堤防

●活動二日目～（グループごとの活動）

仮設住宅は栗林第４、甲子第４、平田に分かれた。残りは沢口製パンと、大槌町と両石のわかめ漁に分かれて活動した。

■栗林第 4

栗林では子どもからの提案により用水路の掃除をするなど、子どもたちと触れ合い、そのなかで子どもの「居場所づくり」に取り組んだ。

■甲子第 4

甲子ではお宅を回りながらお茶っこサロンの周知をした。その際に住民の方からの嬉しいお言葉をもらい、お宅訪問の大切さを再認識した。

最終日には「仮設では料理を作る気になれない」「久しぶりにひっつみ鍋を食べたい」という住民の方たちの声から、住民の方と一緒にひっつみ鍋を作った。学生が主体で鍋を作るはずが、いざ始めてみると住民の方が率先して作ってくださった。誰かと一緒に食べること、誰かに料理を食べてもらうことの楽しさを感じてもらうことができました。そしてなにより、住民同士の新たな繋がりのきっかけ作りができたことが嬉しかった。学生が仲介役となって、無理なく繋がりを広げる画期的な活動となりました。

■平田

談話室でお茶っこサロンやマッサージサロンを行った。サロンと同時進行で出張サロンをし、体育館などを使って子どもたちと遊んだ。地域住民の方と一緒にお散歩をし、昔話や趣味を聞いた。別れ際に「誰かと一緒に散歩をするのは楽しいもんだな。」とおっしゃってくれた。誰かと散歩に行く、誰かとご飯を食べる、誰かとお話しをするなど、誰かと何

かをすることの大切さを初めて認識することができました。

■わかめ漁

大槌町でのわかめ漁は、工場周辺のゴミ拾いやかご洗いのお手伝いをした。

両石でのわかめは、収穫したわかめをボイル加工するという重要な作業をお手伝いをした。2 年たった今ボランティアのニーズが変化してきていることを感じさせられた。

■沢口製パン

お皿洗いなどのお手伝いをしてオープンに向けての準備を進めた。

地元の方たちのお話から沢口製パンが以前から愛されていると知り、そのようなお店の再会をお手伝いできることに感謝と誇りを感じた。

沢口さん夫婦からは仕事ができなかった毎日から、ようやく仕事ができる喜びと、２年間の思いや不安が募っていたように感じました。そんな忙しい中、受け入れて下さったことに感謝し、工場再開とカフェ OPEN 間近の住民の方の心情を感じ取り合いながら活動しました。

●活動を終えて

仮設はもちろんのこと、被災地には様々な想いを抱えた方が大勢います。私たちにできることはすごく小さな事かもしれません。自分たちのやっていることが、役に立っているのか、活動一つ一つに意味があるのか悩んでしまうこともあります。正解のない活動だと思います。しかし、一人一人が真剣に考え、おもいを持って活動しています。遠く離れている場所からではわからない現状がまだまだたくさんあります。

私たち学生ボランティアが寄り添いながら少しでも良い方向を向けるようなお手伝いをしていきたいです。また、活動する中で感じた思いや見て来たことを忘れずに今ここでできることを考えていきたいと思います。